

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

稲森, 雅子
九州大学中国文学講座 : 専門研究員

汪, 洋
九州大学中国文学講座 : 専門研究員

陳, 禕璇
九州大学中国文学講座 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/7405120>

出版情報 : 中国文学論集. 54, pp.85-105, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

稲 森 雅 子

(中国語訳) 汪 洋・陳 禕璇

周知のとおり、本学中国文学研究室初代教授目加田誠（一九〇四～一九四九）は、北京留学時に周作人（一八八五～一九六七）としばしば交流した。その様子は、これまで日記類や随筆により紹介されてきた。最近刊行された『周作人宛日本語書簡目録（簡易版）——附購書一覧』（九州大学大学院言語文化研究院、二〇二五年）により、目加田誠書簡等七点（封書三通、便箋のみ一通、葉書一通、名刺二枚）の現存が明らかとなった。さらに、所有者の厚意により提供された目加田誠書簡等の写真について、周家及び目加田家双方より翻字公開の了解をいただくことができた。本稿は、その写真をもとに翻字し、発信時期や書簡等の背景を紹介するものである。公表をご了承ください。周家と目加田家ご遺族、また仲介の労をとられた中里見敬氏に鳴謝いたします。適宜、汪洋、陳禕璇両氏による中国語訳を付した。

众所周知、本校中国文学研究室の首任教授目加田誠在北京留学期間、曾与周作人多有交流。迄今为止，有关其交往的情形，已通过日记、随笔等资料有所介绍。近年来出版的《周作人所收日本语书简目录（简易版）——附购书一览》，进一步揭示了目加田诚致周作人的信函等七件现存文书，包括三封信封附信纸、一张仅存信纸、一张明信片及两张名片。此外，得益于所藏者的厚意提供，本研究得以查阅相关信函及附属文书的照片，并获周氏及目加田氏两家后人的许可，得以对其内容进行翻字并予以公开。在此，谨向同意公布资料的周家与目加田家后人，以及在其居中斡旋、协调沟通的中里见敬教授，致以诚挚谢意。本文即以现存照片为依据，对上述信函及相关文书进行誊录，并介绍其发出时间及相关背景。文中所附中文翻译，分别由汪洋与陈禕璇两位研究者提供。

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

一、書簡等の凡例等

目加田誠が初めて周作人と面会したのは一九二九年夏であった。東京帝国大学旅行団に加わって北京へ赴き、八月九日午後、長沢規矩也団長、一戸務とともに周宅を訪ねた。³ 親交を深めたのは、北京留学中（一九三三年十月～一九三五年三月）で、一九三四年六月十八日、長男の周豊一（一九一二～一九七）と面識を得たことに始まる。目加田は日記に「小川君の友人、浜といふ人（大阪の人）来り、山本君、周豊一（周作人の息）と共に院子にて食事」と記している（九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」——一九三〇年代北京の学術交流』、中国書店、二〇一九年、一五五頁。以下、本書を『北平日記』と略称）。「小川君」は小川環樹（一九一〇～一九三、のち京都大学教授）、「浜」は濱一衛（一九〇九～八四、のち九州大学教授）、「山本君」は山本守（一九〇六生、のち神戸市外国語大学学長）、三名とも京都帝国大学卒業。濱と周豊一とは、旧制浪速高等学校の同級生で、濱が周家に寄寓するなど生涯の友となった。⁴

目加田誠と周作人の首次会面は在一九二九年夏季。当时他作为东京帝国大学旅行団の一員前往北京，于八月九日下午，随团长长泽规矩也及一户务一同拜访了周氏宅邸。二人之间交情的加深始于目加田一九三三年十月至一九三五年三月在北京留学期间，一九三四年六月十八日，他与周作人的长子周丰一初次相识。据其日记记载：「小川君之友人，名曰滨者（大阪人）来访，与山本君、周丰一（周作人之子）共于院子用餐。」（九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」——一九三〇年代北京的学术交流』、以下称该书为《北平日記》）文中所提「小川君」即小川环树，「名曰滨者」系指滨一卫，「山本君」则为山本君守。三人皆毕业于京都帝国大学。其中，滨一卫与周丰一为旧制浪速高等学校同班同学，关系甚笃，滨更一度寄居于周家，二人也终生保持着友谊。

同年九月二十五日、東方文化学院東京研究所旅行団との宴席で周作人と再会した。⁵ 間もなく、周作人・豊一父子の周旋により、目加田と小川は北京大学で聴講を始めた。⁶ その後も濱や小川とともに周豊一と親しく交わり、しばしば周家を訪れた。翌年一月三日に目加田は「周作人氏と会談、兪平伯への紹介を頼む」。⁷ 兪平伯（一九〇〇～一九〇）は、周作人の北京大学での教え子で気鋭の『紅樓夢』研究者として知られていた。帰国が迫った二月二十六日、

俞平伯との会見を果たし、帰国後間もなく「俞平伯氏会見記」（『中国文学月報』第三号、中国文学研究会、一九三五年五月、三一―三四頁）を発表した。ここに紹介する周家所蔵の書簡類も留学を終え北京を離れる直前より始まる。

同年九月二十五日、目加田在东方文化学院东京研究所旅行团的宴席上再次与周作人会面。不久、在周作人与其子周丰一的协助与引荐下、目加田与小川开始在北京大学听课。其后、目加田与滨、小川等人持续与周丰一保持密切往来、并屡次拜访周宅。次年一月三日、目加田在日记中记述道十八日取回成品：“与周作人先生会谈，请其引荐俞平伯。”俞平伯为周作人任教北京大学期间的门生，以其对《红楼梦》的研究而闻名，被视为当时颇具锐气的青年学者。临近归国之际，目加田于一九三五年二月二十六日如愿与俞平伯会面，归国后不久即发表了《俞平伯先生会见记》。此次所介绍的由周家所蔵的书简，正始于他即将结束留学、离开北京之际。

二、書簡等の翻字及び発信時期の検討

一連の書簡類には、周家で付された二種類の記号がある。本稿もこれに従い、冒頭に記載する。書簡等の発信時期を特定済の場合は、併せて冒頭に記し、西暦を基本とする。配列は、筆者の調査結果に基づく時系列とした。日本文の書体及び仮名遣いは可能な限り原文に従い、改行箇所も原文に拠った。

在此次整理的一系列书简中，周家方面附有两种不同的标记符号。本文亦遵循此分类方式，于各通书简之开头注明相应标记。若已能确定发信时间，则同时于文首标明，以公历纪年为基准。书简的排列顺序依笔者考察所得，采取时间先后顺序进行编次。在文字整理方面，日文书信的字体与假名用法尽可能忠实于原件；换行位置亦依据原文语言表现予以保留。

発信時期の検討にあたり、『北平日記』や目加田誠の随筆類、『周作人日記』八冊（聯経出版事業股份有限公司、二〇二五年）、稻森「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）（二）（終）」・「目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注（上）（中）」（『中国文学論集』第四九号・『文学研究』第一一九―一二二輯。『文学研究』は静永健教授と共著。以下、『北京旅行日記（一九三六年）』・『中国旅行日記（一九四二年）』と略称）などを参照

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

した。

关于发信时间的考证，主要参考了《北平日记》、目加田诚的随笔著作、《周作人日记》八册以及稻森所撰《目加田诚〈北京旅行日记〉（一九三六年）翻刻注（一）（二）（终）》、《目加田诚〈中国旅行日记〉（一九四二年）翻刻注（上）（中）》（分别刊载于《中国文学论集》第四九号、《文学研究》第二一九、二二三辑。其中《文学研究》为与静永健教授的共同著作。下文分别简称为《北京旅行日记》（一九三六年）与《中国旅行日记》（一九四二年））。

（一）四〇〇八（J—一五六二） 名刺 一九三五年三月四日（裏書きなし）

〔印刷〕

九州帝國大學助教授

目加田 誠

〔手書き〕

先日は誠にありがとうございました。明後日

出發いたしますので 御礼旁々挨拶にまゐ

りました

豊一君を

訪ねて二度ばか

り北大宿舎に行きましたがいつも御留守で

御目にかゝれず残念でした。どうぞよろしく

その中 日本で御逢ひする日 wait 居ります

時期は、『北平日記』により特定済である。周作人の名はないが「朝より俾を雇ひ……傳惜華氏、奚氏、孫楷第氏……等をまわる。明後日出発に決定」（二三五頁）とある。翌日の『周作人日記』に「下午……目加田君同山室君來訪、為寫片紹於達夫」とあり、再訪して杭州の郁達夫宛紹介状を貰っている（第五冊三二頁）。なお、郁達夫は目加

日前承蒙厚情，謹致诚挚谢意。

茲因后日即将启程，特此前来致谢并奉别。曾两度前

往北大宿舍探访丰一君，皆以外出，未能一晤，殊感

遗憾。

尚祈代为致意，并冀早日得在日本再晤。

田らに魯迅を紹介してくれた。^⑤なお、「先日」は、二月二十三日夜の周作人宅での送別会を指す。「豊一君」は、周作人の長男で、当時北京大学の学生で、濱一衛を介して面識を得、親しく交際した。

本信件所系時間、已可根据《北平日记》予以确定。虽未直接提及周作人之名，但日记中有如下记载：“自早晨雇车……拜访傅惜华氏、奚氏、孙楷第氏……等人。决定后天出发”。而翌日《周作人日记》则记道：“下午……目加田君与山室君来访，为写片绍于达夫”。由此可知，目加田在再次拜访周作人时，取得了身在杭州的郁达夫的介绍信，准备前往杭州拜会郁达夫。值得一提的是，郁达夫后来确实向目加田等人引荐了鲁迅。此外，信中所提“前几日”，系指一九三五年二月二十三日晚在周宅举行的送别会。“丰一君”即众所周知的周作人长子，当时为北京大学学生，透过滨一卫而与目加田相识，且交情甚笃。

(二) 四一四六(J—二〇六四) 名刺 (印刷のみ、裏書きなし)

九州帝國大學助教授

目加田 誠

書体は、(一)と異なる。目加田は一九三八年三月教授に昇任するから、それ以前のものである。従って一九三六年に北京を再訪した時(十一月七日〜十二月二十日)のものである可能性が高い。あるいは、次に示す書簡に添えられたものであったかもしれない。なお、本年刊『周作人日記』もなお一九三六〜三十七年分は収録しない。

该名片的书写字体与前文所述(一)有所不同。鉴于目加田于一九三八年三月升任教授，因此此名片应为此前所作。虽然不排除该信是作为下一封信件的附件而撰写的可能性，但可以推测，其最有可能是在他于一九三六年重访北京期间所写。值得一提的是，目前尚无一九三六年至一九三七年间的周作人的日记存世。

(三) 二六〇 (J-O二一) 便箋のみ

謹啓 先日は趙氏への御紹介難有存申候 お蔭を以て
同氏に面会 詞林韻釈其他についての疑問を質すを得て
誠に嬉しく存申候 早速御礼に参上可致處 御多忙中
却て御邪魔と存じ わざと書面を以て御礼申上候 改日
御暇の節を伺ひ改めて参上 尚 色々御話承り度存申候
尚 先日御頼み申上候先生御揮毫何卒御願申上候
先は御礼迄 草々
知堂先生

目加田 誠拝

本書簡の「趙氏」は、北京大学などで音韻学を教えていた趙蔭棠（一八九三～一九七〇）である。^⑩また、この時周作人が揮毫したと思われる書軸は、大野城心のふるさと館に所蔵されている。^⑪『北京旅行日記（一九三六年）』には次のような記録がある（傍線は筆者、以下同）。

本信中所提「趙氏」、应为当时在北京大学等校教授音韵学的赵荫棠。此外、推测由周作人于此时所题写的书轴，现藏于大野城心之故乡馆。《北京旅行日记（一九三六年）》中对该情形亦有如下记载。

十一月十四日 午後、周作人氏を訪ひ、趙蔭棠氏に紹介をたのむ。

下午、拜访周作人先生，请其代为介绍赵荫棠先生。

十一月十九日 帰宅已過十時，見周作人先生来信置于案上。

十一月二十日 午後、趙蔭棠氏を訪ふ……色々『詞林韻釈』その他の事を問ふ……色々質問して、得たる所少

なからず。 下午、拜访赵荫棠先生……就《词林韵释》及其他事宜多所请教……所获颇丰。

十一月二十四日 手紙をかく……小川、周作人（以下略）。 修书一封……致小川、周作人诸君。

十一月二十九日（日） 朝、周作人を訪ふ。 晨间、拜访周作人先生。

十二月十五日 来薰来る。樊々山の扇面の箱を作らす。及周作人の書の表装。

来薰来访、囑其爲樊々山之扇面制作匣盒、并装裱周作人所题书轴。

十二月十八日 来薰来る。 来薰再至。

十二月十九日 午後、周作人氏を訪ふ。 下午、拜访周作人先生。

これらの記述より十一月十四日に趙蔭棠の紹介と書軸の揮毫を依頼し、同月十九日に周作人の紹介状を受け取り、翌日趙蔭棠を訪問、二十四日にこの礼状を記したと推測される。同月二十九日は、趙蔭棠紹介のお礼と揮毫書の受け取りを兼ねて訪ねたのだろう。十二月十五日、来薰閣へ書の表装を発注、十八日に受け取った。二十日夜北京を出発することから、十九日の訪問は別れの挨拶で、書軸を携えていたかもしれない。

根据上述记载、可推测目加田于十一月十四日向周作人请求引荐赵荫棠、并委托其代为题写书轴；十九日收到周作人所写介绍信，翌日即前往拜访赵荫棠；二十四日撰写了此次的致感谢信。十一月二十九日的再次拜访，应是兼为答谢为通介绍于赵荫棠与领取所题书法。十二月十五日，目加田将书轴送至“来薰阁”装裱，十八日取回成品。考虑到他于十二月二十日晚离开北京，推测其在十九日造访周作人之际，可能携带该书轴前往，作为道别并致谢之用。

(四一)二二六—(J一〇一六二) 書状本文

謹啓 益々御清祥之段奉賀候

昨秋北京に一寸参りし節は

先生には恰度御出張中にて

拝眉に機を得ずまことに殘

念に存申候 此度九大学生

森一作君北京に旅行致候に

ついては同君は支那文学専攻にて

謹啓：伏惟日益清安、敬頌時祺。去秋遽过北京、适值先生出门、未能抠謁、深以为憾。兹值本校学生森一作君将赴北京旅行。该君专攻支那文学、素受松枝君之教导、久已敬仰先生著述、倾心慕仰不已。倘蒙先生引见、不惟当人感铭无已、亦令我辈深感欣幸。伏思倥偬之际、尚祈俯允为荷。匆匆奉陈、专此敬頌。

かねて 先生の御著書を松枝君

より教はりひたすら敬慕いた

し居る次第若し御引見下さら

ば当人はもとより 私共もこの上なき

仕合せと存知申候 御多忙中

申兼ね候共 何卒よろしく

御願申上候 勿々

周先生

座下

目加田 誠 拝

(四一二) 二二六二 (J—O—一六二) 書状封筒 墨書 消印、切手なし

〔表〕 北京西城八道湾

周作人先生

森一作袖呈

〔裏〕 福岡市

目加田 誠

『周作人宛日本語書簡目録（簡易版）——附購書一覧』には、森一作の名刺も記録されており（四三四二、J—二二六〇、年月日未詳）、森が本書簡を携えて訪問したと推測される。目加田は、一九四二年十一月十五日〜十九日及び二十二日〜二十六日、北京を訪れたが、『中国旅行日記（一九四二年）』に周作人との面会記録はない。周作人も同年十一月二十〜二十五日、河北省へ視察に赴いており、目加田の書簡と合致する。「森一作」は、福岡県出身。一

九四二年（昭和十七）四月、九州帝国大学に入學。¹³九州大学大学文書館資料によると、学徒出陣のため一九四三年十二月一日より休學、一九四四年九月繰上げ卒業、復員後の一九四六年に修了証書が授与されたという。

在《周作人所收日本语书简目录》中，亦记录有森一作的名片，据此推测，森很可能是携带本书信前往拜访周作人的使者。目加田于一九四二年十一月十五日至十九日、以及二十日至二十六日期间两度造访北京，但在《中国旅行日记》（一九四二年）中并无与周作人会面的记载。另一方面，据记载，周作人亦于同年十一月二十日至二十五日前往河北省进行视察，此行程与目加田所写书信内容相符。“森一作”出身于福岡县，于一九四二年四月考入九州帝国大学。根据九州大学文书馆的相关资料，他因应学徒出征政策，自一九四三年十二月一日起休學，一九四四年九月提前毕业，战后复员，并于一九四六年获得修了证书。

さきの『周作人日記』一九四三年五月八日に「下午入浴……原三七、森一作來。」とある（三三〇頁）。このとき目加田の紹介状も持参したと見て良いだろう。原三七（一九〇四—七三）は東京帝国大学の後輩で一九三二年卒業、一九四〇年より北京大学文學院日本文学系副教授をつとめていた。¹⁴目加田は前年十一月十八日北京で原と再会しているから、原にも同様の依頼状を書いて同伴を依頼したと推測される。以上のことから、一九四三年三月書かれた書状を森一作が五月八日に周作人宅へ届けたのだろう。

据《周作人日記》一九四三年五月八日条记载：“下午入浴……原三七、森一作到來。”，可以推测，森一作在此时携带了目加田的介绍信前往拜访周作人。原三七为其东京帝国大学的前辈，一九三三年毕业，自一九四〇年起任北京大学文學院日本文学系副教授。由于目加田曾于前年十一月十八日在北京与原三七重逢，因此推测他亦曾写信托请原同行并引荐。综上所述，可认为写于一九四三年三月的该信件，是由森一作于五月八日送达周作人宅邸的。

他方、小川利康「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇（三）」（『文化論集』第三二号、早稲田商学会同致会、二〇〇八年四月）にも以下の関連書簡がある。冒頭の数字は発信年月日、Mは松枝茂夫、Zは周作人の発信を示す。

此外，小川利康《周作人・松枝茂夫往来书简 战前篇（三）》中也收录有与本案相关的通信。

・19430316M【松枝茂夫↓周作人】(四八頁。頁数は漢數字表示に拠る、以下同)^⑤

こちらの大学の学生 支那文学専攻、森一作といふのが、近く御地を訪れる由で、或は、先生をお訪ねいたすかも知れません。その折は何とぞ御引見下さいます様、御願申し上げます。

本校学生森一作君、主修支那文学、近将前往貴地旅行。或有可能造访閣下。倘届时能蒙引见、实所厚幸、尚祈不吝俯允、特此恳请。

・19430326Z【周作人↓松枝茂夫】(四九頁)

森君尚未見到、四月初旬、須往南京一行、至十五日以後方歸、或恐其時相左亦未可知。

(森君はまだ来ていません。四月初旬、南京へ行き、十五日以降に帰るので行き違いになるかもしれません。)

・19430418M【松枝茂夫↓周作人】(五一頁)

そしてもう無事に北京に御帰着になった頃でせうか。前便で一寸申上げました友人森君はまだ帰って参りませんが、間に合いましたでせうか。

想必如今先生亦已平安返抵北京了罢。前信中曾略提及之友人森君、尚未归来、不知是否赶得上。

目加田が松枝の書簡を知っていたか否かは不明であるが、両者の教え子に対する情愛の深さが感じられる。

虽然无法确定目加田是否知悉松枝的书信，但从中不难体会出目加田与松枝对于学生的深厚关爱之情。

(五一)二二六三(JOO一六三) 書状本文

承はれば御尊母様去る四月廿二日御逝

去被遊候趣 御愁傷様之段深く御察

し申上候 平素至つて御强健なりし

御様子にて かゝる御高壽を享けさ

せられ 安らかに御永眠相成り候御事

謹奉悉：太夫人于去四月二十二日奄逝、伏惟慘痛之

情、何以堪处。平日闻尊堂身体强健、今得享高寿、

安然往生、实乃平生德泽所致、令人肃然景仰。虽知

斯人已逝、众亲哀悼之情、殆难尽述、然孝养多年、

纯至无遗。以比余父母早背、思之不胜哀伤追慕之致。

益覚吊慰之难堪也。伏乞太夫人冥福。
敬上

一に御生前の御高德の致せるところと
まことに尊く覚え申候 皆様の御嘆
きいかばかりかと存じつゝも 長年の間
御孝養残る方なく御盡し有之候御事
幼少の折早く父母を失ひたる我身を
引き比べ悲しくまた御羨ましくも
奉存候 さては一入今の御見送り
堪え難く覚召さるゝことゝ衷心より
御いたみ申上候 御尊靈の御冥
福ひたすら奉祈上候

目加田 誠

周作人先生

(五二二) 二二六四 (J10163) 書状封筒

〔表〕五銭切手(消印不鮮明)

下部に「檢閱濟 大日本帝國通信省」紙貼付(裏へ折り返し)捺印…第十三／檢閱濟

中華民國 北京 新街口

八道湾十一

周 作 人 先生

御悔

〔裏〕日本福岡市馬屋谷二〇

目加田 誠

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

前掲「周作人・松枝茂夫往来書簡戦前篇(三)」に母魯瑞の「訃音(印刷物)」がある(19430430Z【周作人↓松枝茂夫】二五六〜二五五頁)。森一作または松枝から一報を受けた可能性が高く、かつ次のはがきを勘案すれば、一九四三年五月中の発信であろう(『周作人日記』に受取記録なし)。哀悼の意が切々と綴られ、周家に対する親愛の情とともに、目加田の人柄をも看取できよう。なお、北京宛郵便は国内扱いであった。

在前引「周作人・松枝茂夫往来書簡戦前篇(三)」中、收录有关于周作人母亲魯瑞的「訃聞(印刷品)」。因此，可以推测目加田很可能是通过森一作或松枝茂夫得知此事，并结合后续所见明信片内容，可推定此信应为一九四三年五月间所发(『周作人日记』中无相关收信记录)。信中情辞恳切地表达了哀悼之意，既体现了对周氏一家的深厚感情，也可从中窥见目加田为人处世的温厚品格。另需说明的是，彼时寄往北京的邮件被视为国内邮件处理。

(六)〇九四九(J—一六五六) はがき 一九四三年六月三日

〔表〕官製はがき 貳錢

消印 福岡 / 18 / 6・3

一九四三年(昭和十八) 六月三日

中華民國 北京

西城八道灣

周作人先生

〔裏〕活字印刷

初夏の候益々御氣嫌麗しき御事と存じます

此度左記に轉居いたしました。九鐵沿線大橋驛下車徒

歩約十五分全く草深い田舎で背後は丘、前は田圃で

ここに畑でも作りながら

讀書の生活をつゞけるつもりで

居ります

伏想首夏清和。近迁居如左：

九鐵沿線、大橋驛下車后步行約十五分、草葉深

茂之郷野、背丘、前有田圃。拟在此耕田、繼續讀

書生活。特此奉告。

先は御通知まで

福岡市大字三宅西大橋町

第七隣組

目加田 誠

消印より発信時期は確定済であるが、『周作人日記』に受取記録はない。目加田は「当時その辺は周囲がまだ畑であった。働き手が出征して、人手が無いからと、半ばたのまれて私はその畑を借り、そこで野菜や小麦を作った」、「そんなことをしている間に、私の身体は頑丈になり、神経も太くなってきた、腹を据えて古典文学を読むことができた」と回想する。「九鉄」は、現在の西日本鉄道で、前年九月に九州電気軌道など四社と合併して西日本鉄道と改称していた。

尽管可由邮戳确定发信时间，但《周作人日记》中并无其收迄记录。目加田回忆道：“当时那一带周边尚是农田。因青壮年多已出征，无人耕作，我便在半推半就之下租下那块地种起了蔬菜和小麦”，“就在那段劳作期间，我的体质变得强健，神经也逐渐坚韧，终能安下心来研读古典文学”。“九铁 即今日之西日本铁道，前一年（即一九四二年）九月，由九州电气轨道等四家公司合并组建，并更名为‘西日本铁道’”。

(7-1) 114711 (J-O719) 原稿用紙 (LIFE No.156 20×20) 一九六四年十二月十日

周作人先生

久しぶりに北京に来て 中国の偉大なる

躍進を見て驚嘆しております。

松枝茂夫君からのまれた笑府の寫眞

をおとさけいたします

お目にかゝる機会が無いことは残念で

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

隔了很久重到北京，目睹中国的伟大跃进，我感到惊叹。兹奉呈松枝茂夫君所托《笑府》照片。遗憾不能与您见面，谨此祝愿先生健康长安，万福并臻。

すがどうぞいつまでも御健在を祈ります

敬具

十月十二日

目加田 誠

本書簡は一九六四年十月に訪中学術代表团員として北京を訪れた時のものと確認済である。^⑩目加田の随筆「永泰公主の墓」(『洛神の賦』、武蔵野書院、一九六六年)にも「一九六四年秋、中国科学院の招請により……十月六日から約一カ月あまり、広東から北京、それから西安、成都、南京、上海、杭州とまわり……北京に十日間滞在して、学術講演などを行なった後、西安に飛んだ」(二六二頁)とあり、符合する。なお、書簡を記した経緯について次のように述べている。

本信可以确认是写于一九六四年十月，目加田随访华学术代表团访问北京之时。其随笔〈永泰公主之墓〉中亦记载：“一九六四年秋，受中国科学院之邀……自十月六日起历时一个多月，自广东至北京，继而前往西安、成都、南京、上海、杭州等地……在北京停留十日，结束学术演讲后，飞往西安，与书信内容相符。此外，关于书简的写作缘由，目加田亦作如下说明。

一九六三年^{ママ}の秋、私がまた北京に行ったとき、錢稻孫、周作人の両先生にお目にかかりたいと申し出た。しかし『残念ながら、両氏とも生憎だいま北京に居らぬ』という中国側の返事であった。強いて訪ねても、かえって迷惑なことだろうと遠慮して、ただ手紙を托した。あれほど世話になっておいて、今北京に来ておりながら一言のお礼も言えぬ恩知らずになることが情けなかった。お二人とももう八十を過ぎて、再びこの世では会えないだろうと思ったから。

我再次前往北京时，曾表示希望拜会钱稻孙、周作人两位先生。然中方回复却是：“遗憾的是，两位先生皆不巧外出，眼下并不在北京。”我心想，若是强行前往，反倒成了打扰，便作罢，只托人致上一封书信。想到曾蒙二位先生多

方关照，如今身在北京，却连一声谢意都未能亲口言说，实觉惭愧，几近忘恩之人。况且二老皆已年逾八旬，恐今生再无重逢之日，此情此念，愈加怆然。

目加田誠「中国今昔 錢稻孫先生」（随想 秋から冬へ）、龍溪書舎、一九七九年）七〇～七一頁

（七一）二四七三（J—〇七一九）封筒

〔表〕切手（金額不明 四分切手か）

消印 北京／■6412・11・8／12／■

※封筒左上部に「497」と記す

北京西四 八道湾11号交

周 作人 先生

目加田 誠

〔裏〕書き込みなし

消印 北京／■6412・11・8／1■／8（支）

角印 投選員／曹長旆

周作人の手元へ届いたのは、消印のとおり約二ヶ月後であった。『周作人日記』第八冊に次の記録がある。

正如郵戳所示，该信件送达周作人手中约在寄出后两个月。《周作人日记》第八册中对此有如下记载。

一九六四年十二月十一日

得目加田十二日信，在北京所發，云松枝有△笑府▽寫真見寄。不知其如何寄法也。（信係十月十二日所寫，昨始付郵。）〔目加田の十二日北京発の手紙が届き、松枝からの『笑府』写真を届けると書いてあった。いかなる方法で送付されたものか。（手紙は十月十二日付、昨日やっと投函）〕

同年十二月十二日

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

上午得松枝十月四日信^②，〈笑府〉寫真一部，係十日由科學院社會科學部寄出者，郵件通知。（午前中松枝の十月四日付けの手紙と『笑府』写真一式が届いた。十日科学院社会科学部より発出、郵便による通知。）

小川利康「周作人・松枝茂夫往来書簡戦後篇」（『文化論集』第三三号、早稻田商学同校友会、二〇〇八年九月）にも記録がある。奇しくもこれが周作人から松枝宛の最後の書簡である。

小川利康《周作人・松枝茂夫往来书简 战后篇》中亦有对此信的记录。巧合的是，这正是周作人致松枝的最后一封信。

・19641215Z【周作人↓松枝茂夫】（二一〇頁）

十月十二日目加田君的信，於本月十一日始由科學院社會科學部轉到，次日收到『笑府』寫真及尊札，甚爲感謝。『笑府』今始得見全豹，可謂幸甚，始知前此所選缺點甚多。（十月十二日付の目加田君の手紙は、今月十一日になって科学院社会科学部より転送され、翌日『笑府』写真と尊札も拝受。深く感謝申し上げます。『笑府』の全貌を初めて見ることで幸甚ですが、以前編集したものに欠点が多かったことを初めて知りました。）

・19650104M【松枝茂夫↓周作人】（二一四頁）

目加田さんから、北京の様子を色々伺いました。彼は先生にお会い出来なかったことを本当に残念がっていました。しかし『笑府』がともかくお手許に着いたと知って安心致しました。

从目加田先生处听闻了许多关于北京的情形。他对未能拜见先生，深感遗憾。然而得知《笑府》已顺利送达先生案头，也感到一份安心与慰藉。

小川論文によれば、目加田が持参したのは、内閣文庫蔵書の複写である。周作人は『苦茶庵笑話選』（北新書局、一九三三年）執筆時は和刻本の選本二種を参照し、翌夏内閣文庫で『笑府』を閲覧した^②。一九五八年四月八日、周作人は校訂を担当した『明清笑話四種』（人民文学出版社）を出版直後に松枝へ贈った。松枝は周作人の書を底本とし数度翻訳していたが、武藤禎夫氏との共編訳『中国笑話選——江戸小咄との交わり』東洋文庫二四（平凡社、一

九六四年八月）で初めて内閣文庫十三卷本を底本とした。『周作人日記』によれば、十月二十六日に受け取り、二十八日に礼状を書いている（二〇九頁）。松枝は、目加田の訪問に合わせ本書を贈り、複写を預けたのであろう。

据小川の论文記載、目加田此行携带了内閣文库所藏《笑府》的复印本。周作人在撰写《苦茶庵笑话选》一书时，曾参考两种和刻本的选集，并于翌年夏访日期间，在内閣文库亲自查阅了《笑府》原书。一九五八年四月八日，周作人将他负责校订的《明清笑话四种》（人民文学出版社）于出版后赠送给松枝。松枝此前曾多次以周作人的著作作为底本进行翻译，但直到与武藤禎夫先生共同编译的《中华笑话选——与江戸小咄的交汇》（平凡社，一九六四年八月）中，才首次以内閣文库十三卷本为底本。据《周作人日记》记载，他于十月二十六日收到了该书，并于二十八日写了回信致谢。松枝大概是趁目加田的拜访之际赠送了此书，并交托了《笑府》复印件。

周知のとおり、一九六三年より文化大革命の前兆とされる「四清運動（社会主義教育運動）」が始まり、知識人へも厳しい視線が注がれ始めていた。⁽²³⁾ 周作人や銭稻孫の立場は当然微妙なものであったろう。日数を要したとはいえ、松枝の託した写真を含む書簡一式が無事に周作人のもとへ届いたのは、目加田が招聘により訪中していたことと抑制した筆致とが幸いしたのであろう。なお、管見の限り目加田が銭稻孫へ宛てた書簡の所在は確認できない。

众所周知、自一九六三年起，被视为文化大革命前奏的“四清运动（社会主义教育运动）”已然展开，知识分子所处的环境也开始变得日益严峻。在此背景下，周作人与钱稻孙的处境，自然尤为微妙。尽管中途历经时日辗转，松枝所托之照片与信件最终仍能安全抵达周作人手中，恐怕得益于两方面因素：一是目加田此次乃受正式邀请访华，二是信件措辞克制，笔调审慎。另据目前所见资料，尚无法确认目加田致钱稻孙的信件是否仍有存世。

三、終わりに

『周作人宛日本語書簡目録』に収められる書簡の数は膨大な量にのぼり、うち目加田誠書簡はわずか七点に過ぎない。しかし書簡から、目加田が周作人へ心からの信頼を寄せ、親しみを覚えていた様子が窺える。目加田誠の北京

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

留学を契機に両者は面識を得、周作人の晩年まで約三〇年の長きにわたり心温まる交際が続いていた。残念ながら目加田誠に宛てた周作人の返書は、残っていない。しかし、一九三六年秋に周作人が目加田誠のために揮毫した書軸は、大野城心のふるさと館を代表する資料の一つとして、折に触れ地域の人々に親しまれている。

虽然收录于《周作人所收日本语书简目录》中的信件数量极为庞大，但是目加田诚致周作人的信件仅有七件。然而，透过这些书信，依然可以深切感受到目加田对周作人由衷的信赖与亲切之情。二人因目加田在北京的留学经历而结识，自此交往绵延三十余年，直至周作人晚年，始终维系着温暖而真挚的情谊。遗憾的是，周作人致目加田诚的回信现已无存。然而，一九三六年周作人为目加田题写的书轴，至今仍作为大野城心之故乡馆的代表性藏品之一，在各类展览与活动中时常展出，受到当地民众的喜爱与珍视。

注

- (1) 留学中の日記に九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」——一九三〇年代北京の学術交流』（中国書店、二〇一九年。中国語訳＝鳳凰出版社、二〇二一年刊）、戦前の旅行日記に稲森「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）（二）（終）」・目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注（上）（中）」（『中国文学論集』第四九号、『文学研究』第一一九～一二二輯）がある。随筆「中国今昔」十四篇（『随想 秋から冬へ』、龍溪書舎、一九七九年）、「北京今昔」二篇（『春花秋月』、時事通信社、一九九二年）などに回想がある。
- (2) 中里見敬、顧偉良主編。齊藤大紀、杉村安幾子、Daruvata, Susan、中野徹、中野知洋共編。
- (3) 『周作人日記』一九二九年八月九日に「豫記 下午目賀「加」田來……下午長沢、目加田、一戸君來訪」（聯経出版事業股份有限公司、二〇二五年、第三冊四四七頁）とある。一戸務『「苦茶随筆」日訳の序—附、周作人文学序説』（『周作人先生のこと』、光風館、一九四四年）にも言及するが、訪問日は『周作人日記』に従った。「彙報 三学士支那行送別の宴」（『斯文』第十二編第八号、斯文会、一九二九年八月）八三～八四頁、「彙報 禹域短信」（『斯文』第十一編第九号、同年九月）八三頁、清水潔「北平滞在記（上）（下）」（『斯文』第十一編第十一・十二号、同年十一月・十二月）

二月)七八〜八三・六〇〜六七頁参照。

- (4) 中里見敬「濱一衛の北平留学——周豊一の回想録による新事実」(九州大学附属図書館研究開発室年報)二〇一四／二〇一五、九州大学附属図書館、二〇一五年)一〜十頁など参照。

- (5) 前々日二十三日に東廠胡同の東方文化事業総委員会で月見の宴が催され日中の知識人が一同に会したが、三十七名の集合記念写真に周作人の姿は見えない。『北平日記』一八〇〜一八二頁参照。

- (6) 『小川環樹著作集』第五卷(筑摩書房、一九九七年)四三〇頁、『北平日記』一八六頁参照。

- (7) 『北平日記』二一八頁。

- (8) 『北平日記』二三〇頁。

- (9) 目加田誠「論文集のあとに」(目加田誠著作集)第四卷、龍溪書舎、一九八五年)五一六頁ほか参照。

- (10) 趙蔭棠は、韻書成立史を考証した『中原音韻研究』(北京大学出版、一九三二年)の中で、宋本とされてきた『詞林韻釈』が、明代成化頃の書と推定されることなどを指摘した。

- (11) 書は「江國春風吹不起鷓鴣啼在深花裏三級浪高魚化龍痴人猶戽夜塘水 眼裡塵沙耳裡土千峯万峯不肯住落花流水太茫茫剔起眉毛何處去録雪寶頌古應 目加田先生雅令 周作人」(文末【図】参照)。出典は『雪寶頌古』第七、二五則。著者の雪寶重顕(九八〇〜一〇五二、明覚大師)は、三十年余り浙江省雪寶山資聖寺に住し雲門宗を復興。『景德伝灯録』等の公案百則に偈頌を付し(『雪寶頌古』)、臨済宗圓悟克勤が垂示・著語・評唱を付したのが『碧巖録』。雪寶山雪寶寺は曹洞宗の祖庭(周作人生家より直線距離約七〇キロメートル)、目加田家菩提寺は曹洞宗(目加田誠「孟蘭盆会一」、「春花秋月」、時事通信社、一九九二年)。

- (12) 張菊香・張鉄英編『周作人年譜』(天津人民出版社、二〇〇〇年)六四四〜六四六頁参照。

- (13) 『九州帝国大学一覽 昭和十八年』(九州帝国大学、一九四三年)三七七頁。一九四七年西日本新聞入社、労働争議により一九四九年一月辞職。その後はフリーの機関誌編集指導者として活動した。金子徳好との共著に『宣伝活動入門』(日本機関紙協会、一九六八年)がある。管見の限り、周作人への言及は見当たらない。福岡地方労働委員会事務局編『福岡地方労働委員会三年誌 昭和二年—昭和三三年度』(九州労働調査会、一九四九年)一六五〜一八〇頁、

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

日本新聞労働組合連合編『新聞労働運動の歴史』（大月書店、一九八〇年）八三〜八六頁、「福岡県／福岡市文学賞に五人」（『西日本新聞』二〇〇二年一月三十一日朝刊）二六頁、「情報キング 憲法九条・未来を開く 六本松・憲法フェスティバル」（『西日本新聞』二〇〇七年四月二十六日夕刊）三頁ほか参照。

- (14) 『斯文』第十三編第二号（斯文会、一九三二年二月）七六頁、『東方学（東京）』第九冊（東方文化学院、一九三九年一月）十七頁及び第十冊之二（同年十二月）一九七頁など参照。

- (15) 周作人の受取日は三月二十四日（『周作人日記』第六冊、三一四頁）。

- (16) 周作人の受取日は四月二十九日（前掲『周作人日記』、三三八頁）。

- (17) 柘植久慶『戦場を駆け抜けた書簡——軍事郵便物語』（原書房、一九九一年）一三一〜一三三頁ほか参照。

- (18) 目加田誠『孟蘭盆会』（『春花秋月』）五九〜六〇頁、「記念論集が刊行されるに当たって」（『中国文学論集——目加田誠博士古稀記念』（龍溪書舎、一九七四年）四頁）。

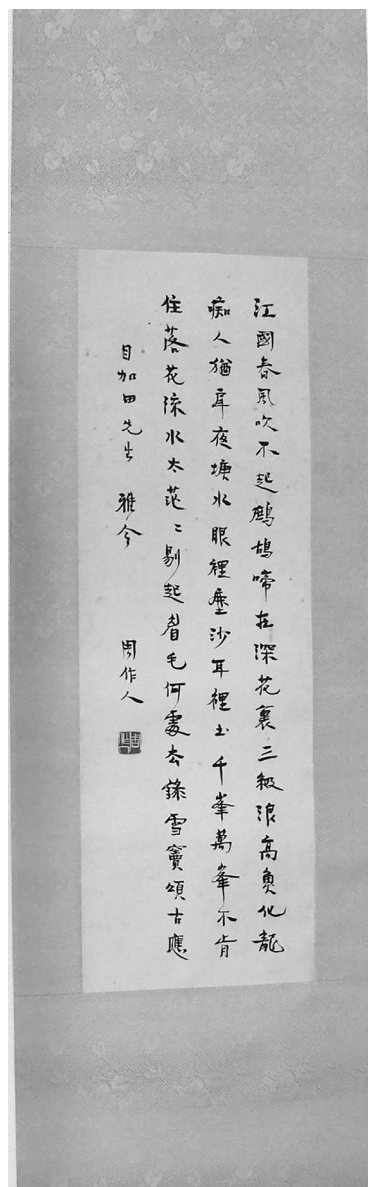
- (19) 「目加田誠教授年譜略」（『文学研究』第六五輯、九州大学文学部、一九六八年）vi頁参照。

- (20) 一九六四年十月四日発信の松枝茂夫書簡及び『笑府』写真について、小川利康「周作人・松枝茂夫往来書簡戦後篇」、「周作人・松枝茂夫往来書簡 補遺」（『文化論集』第五〇号、二〇一七年三月）、「周作人宛日本語書簡目録（簡易版）——附購書一覧」のいずれにも記載なし。

- (21) 『周作人日記』一九三四年七月二十七日に「九時同耀辰至日華學會、邀服部女士至内閣文庫看△珂雪齋外集」十五卷、『笑府』とある（第四冊、五二九頁）。内閣文庫蔵書は三種（豊後佐伯藩主毛利高標献上本十三卷四冊、明治十六年鉛印本一冊、江戸風来山人刪訳一冊〔封面題「笑府」、巻頭題「刪笑府」〕）。また『周作人宛日本語書簡目録』一九二八年九月二五日に南陽堂本店より『笑府』（書誌未詳）の購入記事あり（二五八頁）。一九五八年四月八日、周作人は自身校訂の『明清笑話四種』（人民文学出版社、一九五八年）を松枝へ贈った。当時（明）袁中道『珂雪齋外集』十五卷は、内閣文庫の写本一本のみが確認されていた。現在は復旦大学十三卷本、中国科学院十五卷本の三種がある。
- (22) 武藤禎夫（一九二六〜）は、東京大学国史学科卒業。内閣文庫所蔵『笑府』十三卷など日本に現存するテキストを調査し『笑府研究』（近世庶民文化研究所、一九五六年）を発表、松枝の希望で編訳を協業した。

(23) 前年十月、安藤更生は鑑真和上円寂千二百年記念「訪中日本文化代表团」団長として中国訪問、立会人付で短時間ながら周作人宅で面会した。安藤更生「苦雨齋訪問記」(『大安』一九六四年一月号、大安貿易株式会社)一〇四頁、徳泉さち「周作人・安藤更生往来書簡(2)・(3)」(『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第十九・二十号、二〇一七・二〇一八年)参照。

【図】 大野城心のふるさと館所蔵周作人書軸



江國春風吹不起鴈鴒啼在深花裏三級浪高負化龍
痴人猶弄夜塘水眼裡塵沙耳裡玉千峯萬峯不肯
住落花流水太茫々剔起眉毛何處去錄雪竇頌古應

目加田 先也

雅今

周作人



※本研究は、JSPS 科研費 JP25K16201 の助成を受けたものです。

周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について